

## 全ての人に教育が 行き渡らない

約5700万人。

学校に行きたくても行けない。世界ではこれだけの数の子どもたちが、そんな現実に直面している。国語算数理科社会……。時間割に沿って、先生が教壇に立って教える。手元には、各科目の教科書とノートがある。当然のことのように思えるが、それが限りなく困難な国がまだまだたくさんある。その犠牲になっている多くは、開発途上国で暮らす子どもたちだ。

「政府がせい弱であるために、義務教育であっても必要な予算が確保できず、教育システムの確立もうまくいっていない。また家庭が貧しく、学校に行くよりも家事やきょうだいの世話が優先されてしまふこともありまふ」と、広島大学教育開発国際協力研究センターの吉田和浩センター長は話す。しかしどんな理由があろうとも、大人の事情で子どもが学ぶ権利が奪われてしまふことは、決して見逃してはならない事実だ。

全ての子どもたちに教育の機会を。国際社会がその思いを一つにし、本格的に動き出したのは今から20年以上前。1990年、タイのジョムテイエンでの国際会議がきっかけだった。ユネスコ(国

連教育科学文化機関)、ユニセフ(国連児童基金)、世界銀行、UNDP(国連開発計画)が主催し、世界各国の代表が一堂に会して開かれたのが「万人のための教育(EFA: Education for All) 世界会議」。初等教育の完全普及、教育の場での男女の就学差の是正などを目標に掲げ、先進国が途上国の教育改革を後押しし始めた。

その後も、ユネスコがかじを取りながら、世界各国で取り組みが進められてきたが、教育制度や文化・習慣の違いも大きく、その道のりは、決して容易なものではなかった。そこで2000年、セネガルのダカールであらためて議論の場が持たれ、より具体的な目標を定めた「ダカール行動枠組み(Dakar Framework for Action)」を採択。また時を同じくして「ミレニアム開発目標(MDGs)」も設定され、国際社会が一丸となって、初等教育の完全普及に取り組む機運が高まってきた。

## 日本の強みを生かし より良い教育を届ける

そんな努力もあって、貧しい状況にありながらも、少しずつ増えてきた学校に行ける子どもたち。しかしここで問題となってきたのが、教育の質の問題だ。先生に十



## 特集 基礎教育

# 学びやで輝く

学校に行って勉強して、休み時間に友達と遊ぶ。  
日本で暮らす多くの人を送ってきたであろう子ども時代。  
しかし世界を見渡すと、それは当たり前のことではない。  
開発途上国の子どもたちが直面する現実とは。

編集協力：広島大学教育開発国際協力研究センター 吉田和浩センター長

西アフリカのとある国の小学生

アイシャちゃん(9才)の1日



↑  
アイシャちゃん

5人きょうだいの3番目。両親、兄(12)、姉(10)、弟(6)、妹(1)。ヤギと羊が3頭ずつ。将来の夢は看護師。「妹がマラリアにかかって病院に連れて行った時、テキパキ働く白衣の看護師さんを見てすごいなあと思ったから」

分な指導力がなかったり、そもそも授業で使う言語が家で使っているものと違ったり…。子どもたちが授業についていけない、途中で学校を辞めざるを得ないことも多いのが現状だ。

「そこで今、途上国は教育の質を上げるための取り組みに力を入れています。それこそ、日本が力を発揮できる分野だと思えます」と吉田センター長。江戸時代の寺子屋に代表されるように、古くから、

一人一人の力を伸ばせるような教育を大切にしてきた日本。学校現場には、先生たちが授業研究を通じてアイデアを共有したり、教材研究をしたりするなどの「お家共が掛け算や割り算でなぜつまづいてしまうのか。日本の先生たちは、一人一人の学びの状況を見極めながら、適切な指導方法を考えます。机の配置や子どもへの発言の促し方なども、それを踏まえたものな

のです」。また、教科書作りや家庭学習などで生かされている民間企業との連携も、日本の教育改革のカギとなってきた。

そんな強みを生かして日本が続けてきた国際協力には、何よりも、現場のニーズに即した貢献が光る。学校の先生や保護者の声を聞き、課題に向き合い、その国に合う実践型のモデルをつくっていく。さらにそのモデルを地方から全国に展開し、中長期的に実施できるよ

うな制度や政策を提案していく。こういった一連の取り組みが、現地の人々が本当に必要としている教育へとつながっているのだ。

2015年はMDGsの達成期限の年。それに合わせて取り組みべき課題を整理し、新たな一歩を踏み出そうとしている教育分野。全ての子どもたちに質の高い学びへの道が開かれるよう、日本はこれまでの蓄積を生かした協力を行っていく。

イラスト：永江艶の

1時間目	フランス語
2時間目	算数
3時間目	理科
昼休み	
4時間目	体育
5時間目	フランス語

ある日の時間割。1コマは45分。



7:30  
登校

学校までは徒歩15分。通学路はサバンナで、サソリなどが突然現れることも。



8:00~12:00  
授業

わらぶき屋根の青空教室。机、椅子が足りず、地べたに座る子も。教科書は隣の友達と一緒に見る。ノートの代わりに、自分用の小さな黒板を使う。



12:00~15:00  
昼休み

急いで家に帰る。ランチは朝食と同じもの。そして夕食の準備。うすときねでミレット(雑穀の一種)の脱穀のお手伝いをするのは女の子の仕事。一番下の妹のお世話をし、また学校へ。



5:30  
起床

まだ暗い中、姉妹と一緒に井戸に水くみへ。水を入れたバケツを頭に載せて慎重に運ぶ。往復30分。



15:00~18:00  
授業

暑い時間で喉が渇く。教室には水がめがあつて、その中の水は自由に飲める。水は親たちが運んできてくれる。



18:00  
下校

夕食のお手伝いと妹のお世話。食後は家族で地元のニュースや世界のニュースをラジオで聞く。



21:00  
就寝

電気がなく授業の復習もできないので、早く寝てしまう。



6:30  
朝食

お母さんが作ってくれた「プール」というおかゆを食べる。

